

親鸞における教学の視座（上）

三 木 彰 円

一

法然によって明らかにされた「浄土宗」、すなわち選択本願念仏を宗とする仏教は、『選択本願念仏集』教相章の冒頭に、

問ふて曰はく、一切衆生に皆仏性有り、遠劫より以来心に多仏に値ふべし。何に因つてか今に至るまで、仍自ら生死に輪廻して火宅を出ざるや。 （『選択本願念仏集』教相章・聖全一・九二九頁）

と表されるように、仏教とは何かという素純な問いを尽くすところに明らかにされた仏教である。

親鸞が自らに担っていく教学の課題とは、仏教が法然によって浄土宗として明らかにされたという事実を顕開していこうとするものである。その意味において、親鸞における浄土宗の顕開は、仏教を顕開するという営為にはかならない。親鸞においては、この仏教顕開の課題が『顕浄土真実教行証文類』の撰述に結実されていくのである。

『顕浄土真実教行証文類』は、その全体が「顕浄土真実教行証文類」という題号のもとに貫かれていくものであり、その全体を貫く「顕浄土真実教行証」という課題、すなわち浄土真実教行証の顕開という課題が六つの主題によって

果たされていくものである。したがって、親鸞における「顕浄土真実教行証」という課題を明らかにしようとするとき、そこに不可欠とされるのが、その六巻に展開される六つの主題は、相互にどのような関わるものであるのかという視点であろう。

この六巻に展開される六つの主題に対する考察については、「真実五巻・方便一卷」という言葉に集約されるかたちで従来よりしばしば論じられていることである。そしてまたその「真実五巻・方便一卷」という視点は、曾我量深における「前二巻（伝承）・後四巻（已証）」、金子大築における「前四巻・後二巻二部作」という指摘によって既に再問されていることでもある。^②

この点に対する考究は、もちろん『顕浄土真実教行証文類』全体の文々句々の読解を通してなされていくべきことであるが、そのことに先だつて、ここで問題としてみたいのは、親鸞の教学において、「浄土真実教行証」は、何故に六つの主題を通して顕開されるのかということである。『顕浄土真実教行証文類』六巻の一幕に提示される六つの主題とは、親鸞における「顕浄土真実教行証」という教学の課題が指向する方向のその帰着点にある。このように位置付けてみるならば、そのような六つの主題に教学が展開していくことを必然する基点となる事柄として、いったいどのようなことが親鸞に見据えられていたのだろうか。

親鸞は、『顕浄土真実教行証文類』撰述の「事縁」^③を、『顕浄土方便化身土文類』の末尾に叙述する。そのことについて、さらに確認を加えるならば、その「事縁」とは『顕浄土真実教行証文類』全体に亘る「事縁」であると言わなければならない。したがって、『顕浄土真実教行証文類』六巻に表現されていく主題の一幕が、親鸞において必然性をもって見いだされていったということもまた、その「事縁」に由来することとしてあったという位置づけのもとに見ていくことができるであろう。その意味において、六つの主題として展開することを指向する「顕浄土真実教行証」という親鸞の教学の基点となる事柄とは、『顕浄土方便化身土文類』の末尾に叙述される「事縁」そのもののう

ちに窺うべきこととしてあると言えよう。

本論では、『顕浄土真実教行証文類』の「事縁」のうちには、どのような事柄が基点として見いだせるのかということについて、その教学が指向する方向性の確認を踏まえつつ考察を加えてみたい。

二

ここで『顕浄土真実教行証文類』撰述の「事縁」が叙述される部分に注目するに先だって、『顕浄土真実教行証文類』六巻の構成が指向しているその方向性とは、どのようなものであるのだろうか。その点について、少しく確認をしておきたい。

『顕浄土真実教行証文類』とは、いったいどのような構成を持つものであるのか。このように問うならば、それは例えば、内容に踏み込まなくとも全体を見渡すことよって「二序（三序）^④六巻」という言葉をもって確認できることであり、殊更に言及するまでもない問いであるとも思われる。しかし、ここに敢えてそのような問いを立ててみるのは、『顕浄土真実教行証文類』の構成について、親鸞自身はどのように確認しているのかということ問うてみたいということによる。

『顕浄土真実教行証文類』を著す親鸞自身は、その全体の構成をどのように確認しているのかという視点を持つとき、そこに注目できるのは、

大無量寿経 真実之教
浄土真宗

顕真実教一

顕真実行二

顕真実信三

顕真実証四

顕真仏土五

顕化身土六

(定本教行信証・七頁註)

という、『顕浄土真実教行証文類序』に引き続いて置かれる部分である。

周知のように、「大無量寿経 真実之教 浄土真宗」という言葉は、『六要鈔』における存覚の決定を嚆矢として、『顕浄土真実教文類』の「標拳」として位置付けられてきたものである。

存覚は、『顕浄土真実教文類』を釈するにあたって、

当卷大文第一に教を明かす。中に於いて五と為す。一には標列次第、文の如し。二には題目。三には標拳、題の後の一行なり。四には正釈、文の初より下興の釈(憬興・述文賛)を引くに至る。五には総結、「爾者」以下是れ其の文なり。

(『六要鈔』聖全二・二二二頁・括弧内筆者註)

という五科によって区分し、その「標列」と「標拳」を、

上の標列は、広く一部に通ず。今の標拳は、限りて当卷(教卷)に在り。(同前二二三頁・括弧内筆者註)

と位置付けている。

存覚がこのように「標拳」の位置決定をすることの理由は、「一、標列・二、題目・三、標拳」という順序で科が立てられている点に窺えるように、一つには『六要鈔』が所依としたテキスト自体の問題に起因するものであって、このことに関しては早くから認識されていることであった。^⑤ それにも関わらず、この存覚の標拳の位置づけは、『顕浄土真実教文類』の内容了解の面からも積極的に裏付けられ支持されてきたと言わなければならない。

しかしそのように「標拳」が『顕浄土真実教文類』に積極的に位置づけられることによって、逆に「顕真実教一」以下の「標列」に対しては、その積極的な位置づけがなされてこなかったという問題があることは、改めて確認して

おく必要があるであろう。

先の引文に示されているように、存覚が「標列」を『顕浄土真実教文類』に位置付けていくとき、ここでは「標列」に示される「教・行・信・証・真仏土・化身土」と「教・行・証」との関係に対しては注目されているものの、「広く一部に通ず」る「標列」が、なぜ『顕浄土真実教文類』の一部分として置かれるのかという点については、特に言及されていない。

その点についてはもちろん先に述べたテキストそれ自体に起因する問題も考慮しなければならないが、「標拳」がその内容の面からも『顕浄土真実教文類』に位置付けられたことの積極性に比するとき、「標列」が『顕浄土真実教文類』の一部分とされてきたことには消極的な一面があることを否めないのである。⑥ そのようななかで、「標列」を『顕浄土真実教文類』から切り離す見方も提示されているのだが、やがて「標列」は「全体の目次」という意味以上には、その位置を見出されないということもなっていくのである。⑦

この「標列」と「標拳」をどのように位置付けるかというとき、「坂東本」や「高田本」「西本願寺本」の形態の確認を踏まえてなされた、次の指摘から出発する必要があるだろう。

真蹟本では欠けて見えないが、高田本、西本願寺本その他多くの古写本、並びに寛永、正保、明暦の三刊本等には、総序の次に「大無量寿經 真実之教 浄土真宗」という一行十三字があり、これに続いて「顕真実教一」等の一部の内容目録に相当するいわゆる標列がある。この「大無量寿經」等の十三字は六要所釈本や寛文刊本、その他後世の諸本では、教巻の別題の後、正文の前に置いてあって、教巻だけの内容を標示したものと見て、この一巻の標拳とする。しかし、真蹟本では現在総序の次に各巻の標列と共にこの十三字は欠けてはいるが、教巻の題後文前に置かれていなかったことは僅かに残存する教巻のこの部分に余白のないことから推想される。このことは真実の四法はいうまでもなく、それから開かれた真仏土も化身土も、その根源は『大無量寿經』の真実の

教から顕わされるものであって『教行信証』の六巻全部が『大経』から開かれる意を示すものと見られる。

(名畑應順「教行信証真蹟本に学ぶ」・『親鸞聖人真蹟集成』二一・六八八頁)

この指摘から確認できることは、「大無量寿経 真実之教 浄土真宗」という「標拳」が六巻全体に亘るものであることと、「標列」は「標拳」と一連のものとして見ることによって、単に「目次」ということを意味するものにとどまるのではなく、「真実の四法はいうまでもなく、それから開かれた真仏土も化身土も、その根源は『大無量寿経』の真実の教から顕わされるものであって『教行信証』の六巻全部が『大経』から開かれる」ことを思想的に表現する部分として見ることを私たちに要請していると言わなければならないのである。

「標拳」と「標列」とが一連の部分であるという指摘を踏まえた上で、改めて「標列」を見ると、それが単に「目次」として位置づけることでは尽くしきれない問題を含んでいることは、少なくとも次のように指摘できる。

まず第一には、親鸞の著作中に「標列」に近似する表現形式があるということである。『顕浄土真実教行証文類』を見ると、『顕浄土真実信文類』における『涅槃経』梵行品に拠る文類のうちに、「邪見六臣」の名とその「邪見六臣」が依るところの師名を列記する箇所がある。その列名は、単にその名が漫然と掲げられるという意味にとどまるものではない。愁苦する阿闍世が耆婆の言葉を通して釈尊に値遇し、無根の信を獲得していくという文脈にあって、その列名は、それ以前と以後との主題を截然しつつ密接に関連させるものであり、重要な展開点となる場所に置かれるものである。また『讚阿弥陀仏偈和讃』・『浄土和讃』・『高僧和讃』においても同様の列記・列名を見ることができるのであり、それらはそれぞれ和讃の内容主題に対して密接な関連を持つものであると言わなければならない。^⑩

第二には、各巻の首尾に置かれる題号と、「標列」に示される題号とを見ると、相互の間には、「浄土・浄土方便」という事柄に対しての着目がなされていることを指摘しなければならない。そのことは「坂東本」の『顕浄土真仏土文類』・『顕浄土方便化身土文類』の題号の表記に着目していくとき、十分に注意を払わなければならないこと

として示唆されていると言える¹²⁾。

「顕浄土真実教行証」という課題を、より積極的に「顕浄土」という課題として確認した上で、そこに顕開される「浄土」を「標列」の表記を通して確認してみるならば、その「浄土」とは、あくまでも「浄土・浄土方便」の呼応という視点において顕らかにされる事柄としてある。したがって、「一」から「六」という次第を明確にして立てられる「真実教」・「真実行」・「真実信」・「真実証」・「真仏土」・「化身土」という六つの主題も、「浄土・浄土方便」の呼応を顕らかにする主題としてあると言えるのではないだろうか。

六巻を「真実五巻・方便一卷」という見方に集約することによって、「真実」と「方便」という視点を立てた上で「浄土」を論じていくとき、そこに問題としてあるのは、その「方便」とはいったいどのようなこととして確認されているのかということであろう。「方便」という言葉で示されていることが明瞭にならないならば、そこで問題とされる「真実」と「方便」は、人間の現実の諸情況における相對關係のうちに「浄土」を矮小化して取り込むことにもなるのであり、セクトとしての浄土と非浄土とを区分する視点にもなっていくであろう。

法然によって独立された「浄土宗」とは、あらゆる点で相對化を免れ得ない人間の諸情況を超越することであった。その点において、人間の現実の諸情況に取り込まれた浄土と一線を画するところに「浄土」を確かめるものであったのである。親鸞がその法然の「浄土」を「宗」とする仏教を、「浄土・浄土方便」という呼応において問題としていくところには、「方便」を「浄土方便」として明確にするという重要な視点があるのでないだろうか。つまり、各巻の題号の表記と「標列」の表記との間にある「浄土・浄土方便」という事柄への着目は、その点を示唆しているのではないだろうか。

以上の点については、問題提起の域を出ないことではあるが、「標列」についてそのような視点を立ててみると、その視点は「大無量寿經 真実之教 浄土真宗」と掲げられる「標挙」とどのように関わっていくものなのであるか。

「標拳」に「大無量寿経」と掲げられているのは、「顕浄土真実教行証」という親鸞の教学の眼目が『大無量寿経』にあるということを端的に示すものである。したがって「標列」に示される六つの主題は、その『大無量寿経』の教説を明らかにする主題として立てられていくものであると見なければならぬ。繰り返せば、親鸞が「標列」に示す六つの主題とは、「浄土・浄土方便」の呼応を確認の軸とすることによって、法然が明らかにした「浄土」すなわち人間の相対状況を超える「浄土」を顕開しようとするものである。そこに親鸞が『大無量寿経』の教説によって顕開する「浄土」があると云える。

そしてまたその「浄土」を「宗」とすることは、「標拳」に「真実之教 浄土真宗」と掲げられるように、あくまでも「真実之教」・「浄土真宗」という「教」と「宗」との対応のもとに領かれることでなければならぬのである。そのことはさらに言うならば、人間が「浄土」を「宗」とするということは、「浄土」を明らかにする「教」との対応のもとに明らかになる「宗」でないならば、「宗」は人間の諸情況のなかで限りなくセクトに頹落していくものでしかないのである。そのような「宗」に簡ぶ「真宗」を明確にしようとするところに、「真実之教」を『大無量寿経』に確かめる親鸞の課題があるのである。

三

「標拳」と「標列」に注目していくことによって、親鸞における「顕浄土真実教行証」という教学の課題が指向する方向性を、前節のように確かめてみると、『顕浄土真実教行証文類』全体の「事縁」の叙述のなかに、そのこととはどのような事柄を見ていけるのだろうか。『顕浄土方便化身土文類』に叙述される「事縁」とは、親鸞の教学の方向性と帰着点を決定していく基点をも叙述する「事縁」としてあるものである。それについて、その叙述の展開に留意しつつ考察してみたい。

『顕浄土方便化身土文類』の末尾に記される部分について、ここまで「事縁の叙述」という言い方を取ってきたが、これについては、「後序」あるいは「流通分」と言う方が一般的であろうし、無理のないところであろう。

この点について、存覚は『六要鈔』において『顕浄土真実教行証文類』の本文を、三分して、

第二に正しく文を解せば、経論釈義の常の例に准依して、文を分かちて三とす。一には序、即ち序分。二には標列自り下、第六の末に『論語』の文を引くに至るまでは、是れ正宗分。三には「竊以」自り以下、終り巻を尽くすに至るまでは流通分なり。

(聖全二・二〇六頁)

述べる。またそこに「流通分」と位置づけられていくことは、同時に、

当巻大文第六に化の身土を顕明す。中に於いて四とす。一には題目、二には標拳、三には正釈、四には総結なり。

(同前・三七一頁)

と示され、さらに、

第三に流通分とは、「竊以」以下是れ其の文なり。又当巻に於いて四科を分かち時、之を総結とす。

(同前・四三九頁)

と示されていくように、第六巻たる『顕浄土方便化身土文類』の「総結」としてあるということと、『顕浄土真実教行証文類』全体の「流通分」としてあることとの、両義を持つ部分として位置づけられている。

この「流通分」という存覚による位置づけには、十二分の注意が払われなければならないことは言うまでもない。しかしその「流通分」を改めて見直すならば、そこには「竊かに以みれば」という言葉から書き出され「妙果を安養に顕わさんと矣」と結ばれる、いわゆる「御自釈」に相当する部分と、『安樂集』・『華嚴経』に拠る文類とが置かれているのである。その「流通分」に対するととき、

竊かに以みれば、聖道の諸教は行証久しく廃れ、浄土の真宗は証道今盛んなり。

(定本教行信証・三八〇頁)

という言葉をも、「流通分」として位置づけられている『安樂集』・『華嚴經』に拠る文類の結びまで、自らの意識に一貫して持続し得ているのかということも、一度確かめてみる必要があることではないだろうか。

本論において敢えて「事縁の叙述」という表現で位置づけようとするのは、その「御自釈」に相当する「竊以」から「顕於安養矣」という部分である。この部分に視点を集約させていくのは、そこに記述される事柄を明瞭に見据えたいということによるが、それによって、『安樂集』・『華嚴經』に拠る文類までも包んでの「流通分」、すなわち親鸞における「顕浄土真実教行証」という教学の課題の流通ということを見ていけるのではないだろうか。

そのようなところから改めて「事縁」の叙述を見るならば、そこに文章の表現形態として気づかされることがある。そのことを明確にするために、次に「事縁」の叙述を白文で掲げてみたい。

A. 竊以 聖道諸教 行証久廢

浄土真宗 証道今盛

B. 然 諸寺釈門 昏教 兮 不知 真仮門戸

洛都儒林 迷行 兮 無弁 邪正道路

...

C. 然 愚禿釋鸞 建仁辛酉曆 棄雜行 兮 帰本願

元久乙丑歳 蒙恩恕 兮 書選択

...

ここで「B」「C」の文章の傍線を付した部分に注目していくとき、それぞれの文章は同様の構造によって示されていることに気づく。もちろんそこに示される内容は、それぞれの文章における内容を持つものであって、あくまでその文脈において捉えるべきであり、直ちにそれを同列に見ようとするのではない。「B」・「C」の文章は、共に

「然るに」という言葉によって書き出されており、そこで全体の記述が一転していることは容易に窺えるのだが、さらに注意されるのは、「B」において「然…兮…兮…」と示された文体が、「C」においても同様に繰り返されているということである。したがって「B」以降の文脈と「C」以降の文脈は、その内容が展開しているのみならず、そこに何らかの対応があるとみなさなければならぬのではないだろうか。

すると、「B」を発端として展開される「事縁」と、「C」を発端として展開される「事縁」には、それぞれどのようなことが叙述され、それが展開していくところには、どのようなことが確かめられているのであろうか。

註

① 『顕浄土真実教行証文類』の首題と尾題について、坂東本では巻首は欠損しているが、尾題には「顕浄土真実教行証文類六」（『親鸞聖人真蹟集成』二・六七九頁）と記される。また高田本においては、首題に「顕浄土真実教行証文類第一」（法蔵館刊『専修寺本教行信証』上・七／九頁）とあり、尾題に「顕浄土真実教行証文類六」（同前下・七三三頁）と記される。

② この点については、井上円『教行信証』構造論序説（『真宗研究第三六輯』一九九二）に論究されている。

③ 「惣序の文は、まさに類聚せんとする『教行信証』の内容を開頭するものであり、後序の文は『教行信証』を編集せる事縁を叙述せるものである。」（金子大榮『教行信証講読 真化卷』四一―六頁）

④ ここに「二序」と言うのは、親鸞自身が「序」と記す『顕浄土真実教行証文類序』・『顕浄土真実信文類序』に注目するものであり、「三序」と言うのは、「総序」・「別序」・「後序」である。「三序」の問題については、廣瀬果『教行信証の「後序」について』（大谷学報六七―二号・一九八七）を参照されたい。

⑤ 『六要鈔』について古い注釈とされる惠雲（高田派・一六一三―一六九二）『教行信証鈔』（二六八六刊）には標拳と標列の先後について次のように述べる。「異本に序と標題との間に「大無量寿経真実之教浄土真宗」の十三字有り。不正なり。古本には『教卷』の題と本文との間に此の十三字有り。此の本是れ正なり。」（高田学報第八六輯）

また香月院深励は「是より下は『教卷』の本文なり。ときに此の一行は、坊間四本の中、寛文本には此にあるけれど、外の三本はみな上の「顕真実教一」と云ふ前の処にあるなり。これは此にあるのが勝れた様なり。よって高田の慧雲の『鈔』に、

「顕真実教」と前にある本は宜しからずと簡んであり。而しこれも正否を論ずることは、末学として恐れ多きことなり。異本として見るが穏やかなるべし。坊間四本の中三本ともに初めの処に「顕真実教一」等とあり。あの処より「教卷」の中なれば、この一行をあの前に置くこともあるまじきものでもない。然れば異本とすべし。さりながら今家御相承の本は、寛文本の通りなり。六要鈔も寛文本のごとく、御延書みな寛文本の通りなり。「(教行信証講義・教行信証講義集成一・二二八頁)と述べる。道隱(本願寺派・一七四一―一八一三)も同様の指摘をしている(「教行信証略讀」・同前・二二二頁)。

⑥ 深励は、標列について、「(広文類)一部が巻をわけると、この六段になると云ふことを初めに列ぬる」と述べるとともに、「(教卷)から独立したものであるという見方を批判する。しかしこれは「(教卷)の内容を踏まえて積極的になされた標列の位置づけではない。深励は、清涼澄観の『大方広仏華嚴經疏卷第四』(大正蔵三五・五二七a)や智周の『成唯識論演秘卷第一本』(同前四三・八一―b)によって、「(以文從義の科)〔文をかまはずに義の方からわかつか〕」と「(以義依文の科)〔義をかまはず文のありどころで科を立つる〕』という二つの分科法を紹介し、「(標列)を『(教卷)の一部分とすることは、『(文のありどころ)』に注目する『(以義依文の科)』に基づくものであることを確認している(「教行信証講義集成一・二二〇頁)。

⑦ 惠雲は「(標列)を『(標題)』と言ひ、『(顕浄土真実教行証文類序)』に位置付けた上で次のように述べていく。

「(標題は即ち是れ憶持易くして信心を起さしめんが為なり。又生起を雜亂せざらしめんが為の故なり。生起は次第なり。教に依つて行を起こし、行に於いて信を生じ、信を以て証を得るなり。)(「(教行信証鈔)・高田学报第八六輯一六・二頁)」

⑧ 「(聖人自ら、本典六軸の順序を標べ列ね給うたのである。(中略筆者)この標列を分科するに就いて、『(教卷)中に分科する人もあり、『(教卷)』以外に出して分科する人もある。勿論『(教卷)』以外に出して分科する方が義としては勝れている。今本書に於て『(総序)』の附章にしたのは講義の便宜上からしたのみで、『(総序)』に属すべきものでないことはいうまでもない。今でいうたら、書籍の中の目次のようなものである。)(山辺習字・赤沼智善『(教行信証講義) 教行の卷』七九頁)」

「(大無量壽經) 眞実之教 (浄土眞宗) これは『(教卷)』の題号の次に位置せしめた方がよさそうである。『(教行信証)』では各巻の初めに全体を総括して示す願や句が書かれている。これを『(標拳)』といっているが、この句は『(教卷)』の標拳とみてよいのではなからうか。

しかし次の「(眞実教を顕わす一、(中略筆者)化身土を顕わす六)」というのは『(教行信証)』全体の目次を示したものとみる

べきであろう。」(星野元豊『講解教行信証 教の巻行の巻』三三五頁)

⑨ 智暹(本願寺派・一七〇二―一七六八)は、『六要鈔』所依のテキスト同様に「大無量壽經」以下の「標拳」を『顕浄土真実教文類』の標拳とするが、『顕浄土真実教文類』の直前に置かれる「標列」について、『顕浄土真実教行証文類序』・「顕浄土真実教文類」の双方から独立する部分として位置づけ、「此れ総じて一部の別目を列ぬ。教は是れ能詮、行等は是れ所詮なり。教に依りて行を起こし、行に就いて信を立つ。信行具足して真証を得、真仏土を見る。真実既に顕らかなり。当に方便を弁すべきが故に、後に化身土を分別す。真仮差別有りとも雖も、皆済凡の大悲に非ざること莫し。斯れ乃ち六軸の次序なり。」(『教行信証文類樹心録』・真宗全書三六・七頁)と述べる。「標列」を「六軸の次序」と言い切るように、序として見ている点が目される。

今本論において「標拳」と「標列」を一連のものとして見るということは、『顕浄土真実教行証文類』の構成という視点を立てようとするからであり、「坂東本」において、「標拳」と「標列」がそこに所在したか否かということを直接に問題とするものではない。また、『顕浄土真実教行証文類序』・「顕浄土真実教文類」のどちらかに「標拳」と「標列」を所属させて見るのか、あるいはその双方から独立させた部分として見るのかということを直接の問題とするものでもない。これらの点については、さらに検討を加えなければならないことであるが、ここでは「標拳」と「標列」が独自の内容を有するという点のみを指摘するに止めておきたい。

⑩ 『定本教行信証』一六四頁

⑪ 『讚阿弥陀仏偈和讃』冒頭に、「讚阿弥陀仏偈曰 曇鸞和尚造」以下、『讚阿弥陀仏偈』・「十住毘婆沙論」よりその要文と阿弥陀仏の三十七名が掲げられる(定本親鸞聖人全集二・四頁)。「浄土和讃(三経意)」冒頭には、「阿弥陀如来 観世音菩薩 大勢至菩薩」以下、十五聖の名が掲げられる(同前・三三頁)。「文明本」高僧和讃」においてもその全体を結ぶ位置に、「天竺 龍樹菩薩 天親菩薩」以下、三国の七祖と聖徳太子が掲げられる(同前・一三八頁)。このうち「浄土和讃」冒頭の列名には、「提婆尊者 阿闍世王 行雨大臣 守門者」も併せて掲げられており、『顕浄土真実教行証文類序』に「然則浄邦縁熟 調達闍世與逆害 浄業機彰 釈迦韋提選安養 斯乃権化仁 斉救濟苦惱群萌 世雄悲 正欲惠逆誘闍提」(定本教行信証・五頁)と示されることとの関連において注意されるところである。

⑫ 「坂東本」では、『顕浄土真仏土文類』の首題・尾題共に、当初「顕真仏土文類五」と記され、前者は墨筆で、後者は朱筆で「浄土」の二字が後に書き加えられている（親鸞聖人真蹟集成二・三九九／四六九頁）。また『顕浄土方便化身土文類』もその首題は、当初「顕化身土文類六」と記され、墨筆で「浄土方便」の四字が後に書き加えられている（同前・四七三頁）。さらに付け加えれば、『顕浄土方便化身土文類』に、「斯乃真宗也、已顕真実行之中畢」（定本教行信証・二九〇頁）と、『顕浄土真実行文類』を指示して「真実行」と記されている。いずれも「標列」を考える上で注意されるところである。